
完全人間 ～ 不知火仏の一日 ～

東西南北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全人間 〳 不知火仏の一日 〳

【Nコード】

N0030BA

【作者名】

東西南北

【あらすじ】

世の中には二種類の人間がいる。

「不完全人間」と「完全人間」だ。

「不完全人間」とは世に言う大多数の一般的な人間だ

「完全人間」とは大多数の人間にとって異常で歪な存在がゆえに、社会には適応できない人間たちである。

高校二年生である不知火仏は、「無知全能」という「完全性」をを持ちながら、社会に適応し日常生活を送っている。そんな彼が送る、異常な平凡と歪な日常の物語。

プロローグ（前書き）

小説を書いたことがないので、稚拙な文章になり読みづらいと思うことが多々ありすぎると思うので、書き方、または内容にご指摘アドバイスがあれば是非言ってください。
感想をお待ちしております。

プロローグ

プロローグ

世の中には二種類の人間がいる。もちろん厳密に分類すればその二種類から更に派生するわけだが、それについては後々機会があれば、詳しく話そうと思う。

話を戻したいと思う。

完全人間と不完全人間。

これが完全人間こと、不知火^{しらぬい}仏^{ほとけ}が定義する二種類の人間だ。

そもそも人間とは非常に不完全な生き物だと僕は常々思っていた。ゆえにほとんどの人間、99.9%以上が不完全人間であり、逆に完全な人間というのは、人間という枠から酷く逸脱した、酷く歪で、不快で、恐ろしく、おぞましい特殊な人間であり、ゆえにそのほとんどが、人間社会に適合できず、劇薬という形で、人間社会に混ざり込んでいる。

僕は完全人間でありながらも、運良く僕の完全性は、人間社会に適応しやすく、ゆえにどちらかと言えば不完全人間よりの完全人間なのだと認識している。

だからなのか僕は日常がとても好きだ。

平凡に溺愛している。

ただ作業のように繰り返される毎日こそに至福を感じている。

ゆえに僕の日常を壊す行為を、僕は決して許さない。

だから僕は完全人間が嫌いだ。無意味な破壊行為に酔いしれる不完全人間も同様だ。

だがどんなに異常な不完全人間であっても、そもそも完全人間とは格が違い過ぎる。

奴らは世界にとって、異常であり、生物として歪であるがゆえに、ただそこに存在するだけで、害悪であり、日常を破壊する。

完全人間である僕が、日常生活を謳歌する姿、そんな異常で歪んだ光景を奴らは放っておいてくれるはずがない。

きっと僕の『日常』に混ぜてもらう為に嬉々としてやって来るだろう。

だから僕はこいつらを、視界に入れたくないと思う。

だから同じ空気を吸いたくないと思う。

だから同じ完全人間でいたくないと思う。

だからどこかに存在していると思いたくないと思う。

だから殺したいと思った。

僕はこれから君たちにある話を読んでもらいたい。

何、そんな長い話じゃないさ。

ちょっとしたライトノベルとでも思っただけで読んでもいいと思う。

これは僕が日常を過ごすための『日常』のお話。

もし君たちが僕の行為を否定して、完全人間を肯定するのならば、君たちはきつと完全な人間なのだと思う。

なんなら僕の日常を壊しにすれば良い。

それでも僕は守り続けるけどね。

前置きが長くなってしまったみたいだね、そろそろ物語を始めようと思う。

それでは、完全人間「不知火仏」の一日の始まり始まり。

二話（前書き）

導入みたいなもんです。

二話

僕は自分が嫌いだ。

いや……許せないと言っても過言ではない。

ナルシストという言葉を知っているだろうか。彼らは自分が好きで好きでしようがない人種らしい。

僕はその単語を知ったとき、そいつらを心底羨ましいと感じた。だって自分が好きということほど、幸福なことはないよ。

だってそうだろ？好きな奴と居るとき、人間は最も幸福を感じるのだろ。なら好きな奴と一心同体なナルシスト達は最高に幸せだ。

僕も一度で良いから自分を好きになってみたいよ。

ああー自分を好きな世界ってどんな世界なんだろう。

夢の中の不知火^{しらぬいほとけ}仏が呟いた瞬間、突如彼を呼ぶ声がして現実世界に引き戻された。

不知火は気分の悪い夢を見たためか、不機嫌そうに、机から顔を上げた。

鋭い目付きに、やや整った顔立ちが、より一層の不機嫌さの演出をしている。

不知火の目の前には、きりつとした整った顔立ちの女の子が、不

知火の不機嫌な顔にも全く動じることなく、仁王立ちで腕を組み、不知火を見下ろしている。

彼女は迫力を出しているつもりかもしれないが、子猫っぽい雰囲気顔立ちと、肩まで伸びたポニーテールが幼さを演出しているため、迫力は皆無と言ってもいいだろう。

「完全に寝ぼけた顔しちゃって！もう放課後だよー寝る時間じゃないよっー帰る時間だよっー」

不知火を起こし、矢継ぎ早に話しかける彼女の名は、能登路歩夢^{のとうあゆむ}、不知火のクラスメイトであり、クラス委員長をやっている、明朗快活でお節介な少女である。

不知火に積極的に関わろうとする人物は少ないので、不知火が学内で認識している数少ない人物の一人だ。

「んー委員長……今何時？」

不知火は瞼をこすりながら、気だるそうに話しかけた。

「えーと……午後六時少し前だねっ！というか私の名前は委員長じゃないよっ！歩夢って呼んでって何度も言ってるでしょ！」

能登路はポニーテールをびよこびよこ揺らしながら、冗談半分にもとれるように怒っている。

「じゃあ歩夢さんで……」

（つかもう六時か、こんな時間まで寝てるなんて……）

不知火は放課後まで昼寝してしまった自分に少しイラついた。

「そういえば、なんで歩夢さんはここに？」

「へっ、私？ちょっとクラス委員長の集まりで長引いちゃってさ！あとね、毎日言ってる気がするけど、明日になったらまた委員長って呼ぶのはなしだよ！分かった？分かったね？分かったよね？分かれますええええ！」

歩夢は突然な質問に少し驚きながらも、能登路節を炸裂させ、不知火に追い打ちをかける。

「分かった分かった。明日からはきちんと歩夢さんって呼ぶから落ち着いて」

不知火はテンションがうなぎ登りで上がる歩夢に圧倒され、少し引き気味だ。

「よしよしっ。分かれば良いんだよっ、ワトソン君。嘘は針千本だからね」

先ほどのハイテンションは嘘かのように、ケロツと平常に戻り、嬉しそうに笑っている。

相変わらずコロコロと表情が変わる面白い奴だなと思いつながら、不知火は机にかけてある鞆を持ち立ち上がった。

「こんな時間だし、僕はもう帰るよ」

「うんっ！私もこれ片付けてから帰るから、先に帰ってて」

不知火は歩夢と挨拶をした後、夕闇に染まる街並みの中、家路を急ぐ。

逢魔時が見せる光景はどこか幻想出来で、現実と切り離された幽世の世界を感じさせる気がする。

その美しさと不気味さを兼ね揃えた街並みから、不知火はなんとなく嫌な予感を感じた。

噂話（前書き）

少し日が空きましたが第三話。
文章のぎこちない感が凄い。

噂話

「ねーねー人喰いジェントルマンって知ってる？」

「えー何それ、なんかの怖い話みたいなの？」

「違う違う、最近流行りだした噂だって」

「うーん、聞いたことないかも。どんなやつ？むしゃむしゃーって人を食べちゃうの？」

「食べないって！ていうか人をむしゃむしゃ食べてたら、全然ジェントルマンっぽくないから」

あははは

「話し戻すけどそれでね、その人喰いジェントルマンっていうのはね、ジェントルマンっぽい格好をしてね、夕方のこの街のどこかに現れるんだって、しかも目の前に突然だって」

「ジェントルマンっぽい格好って」

「ちょっとー！人がせつかく教えてあげてるのに、笑って茶化さないでよ。もう！」

「ごめんごめん、ちゃんと聞くから、ゼヒオシエテクダサイオネガイシマスー」

「なんで棒読みなの……まあいいや、それでね……そのジェントルマンに会った人はね、パツって一瞬で消されちゃうんだって！しかも消された人は、みんなに存在したことを忘れられて、一生そのジェントルマンの奴隷にされちゃうんだって！やばいでしょ！？」

「うーん……会った人消されて、みんなに忘れられちゃうなら噂にならないでしょ、しかも奴隷とかなんか変態っぽいし、どうせ男子が流した噂っぽくない？」

「そうかなー、でもこれすごい流行ってる噂だよ。きっと何かあるんだって」

ここは、不知火と歩夢の所属する2年D組の教室である。現在は休み時間で、どこのクラスでも賑わっている。

普段の休み時間は机に突っ伏して寝て過ごす不知火だが、昨日夕方まで寝過ごした反省からか、今日は窓際にある自分の座席から、窓の外を眺めながら、クラスの話しに耳を傾けている。

現在この学校でもっとも話題になっているのが、人喰いジェントルマンの噂である。

この教室でも、大半の人がその話題で盛り上がっており、いつもなら、このような噂話に興味を示さない不知火も、自分の座席の目の前で、盛り上がるクラスメイトの女子二人の話を聞いているうちに、若干の興味を持ち、ふと違和感を感じた。

（あらためて意識してみると、教室のどこでもこの話題でいっぱいだな。こんなに流行っているのに、クラスにも知らなかった奴がちらはらいるし、聖者の中に犯罪者が紛れ込んでるみたいな、気持ち悪い違和感を感じる）

不知火は話しから感じた違和感について考えていると、背後から突然、背中への衝撃と共に、「えいさっ！」と言う掛け声が聞こえた。

声の主はささつと不知火の目の前に回り込み、「歩夢ちゃんでしたー、どう驚いた？驚いた？」と、相変わらずのハイテンションで駆けるように不知火に話しかけた。

相変わらず元気な奴だなと、半分呆れつつも返答をする。

「おはよう委員長。凄い驚いたよ、ところで突然どうしたの」

「あーっ！あーっ！あーっ！また委員長って呼んだ。昨日あれだけ言ったのに！歩夢ちゃんって呼ぶって言ったのに！酷いよ酷いや、不知火君の意地悪っ」

歩夢は頬を膨らめせて、怒った様相で、ふんつと顔を横に逸した。

「ごめんね歩夢さん………ついうっかり………僕って色々忘れっぽくて」

不知火は申し訳なさそうに歩夢に謝る。

「もう！不知火君は忘れっぽすぎるよっ！アルツなんかだよっ

！いい加減堪忍袋の緒が切れちゃうよっ」

すでに教室での恒例行事となる、この二人のやりとりには、クラスメイトはまたやってると思ひながら、遠巻きに二人の様子を眺めている。

「ほんとにごめんって……」

「メモ」

「えっ」

無言の間を打ち破った歩夢の唐突な単語に、不知火は反射的に声をあげてしまった。

「もう忘れないように、メモするのっ」

「分かった。もう忘れないようにきちんとメモするよ」

人喰いジェントルマンの噂話の影響だろう、忘れるということに對して、少し過敏になっている歩夢は、いつも以上に食い下がる。

不知火は、そんないつもより過敏な反応をする歩夢に、少しばかり疑問を感じながら、おとなしく従うことにした。

『委員長を必ず歩夢さんと呼ぶ』

「メモったよ。ところで歩夢さんは、僕に何の用だったの」

「あつ！そうだった、えつと……大した用じゃないんだよつ、ただ不知火君が昨日遅くまで学校に居たから、帰りに人喰いジェントルマンに食べられなかったか心配で、確認にきたんだよつ」

さつきまでの不機嫌は嘘のように、ビシッと楽しそうに敬礼をする歩夢。

「確認つて……教室にいるんだから確認も何も……」

不知火は少し苦笑をする。

「でもほら、話しかけてみたらパツって消えちゃうかもしれないでしょ、念のためだよ」

「念のためつて……なんか歩夢さんらしいね」

不知火の笑い慣れていないような、少しぎこちない笑みを見て、歩夢は「私らしいつて何よつ」と言いながらも、してやったりと、弾けんばかりの笑顔でその笑顔に応えた。

歩夢の一挙一動は元気に溢れていて、自然と周囲の視線を惹きつける力を持っている。

不知火は、そんな歩夢と話していると、なんとなく楽しい気分になる自分が居ることに、最近気づき、それを悪くないと感じている。

とある理由から、普段は話しかけづらいオーラを纏っている不知火も、そんな歩夢の影響により、この時は普段のなりを潜めて、ごく普通の一般的高校生に見える。

普段から正反対の理由で目立っている二人が、楽しげに話しており、また、容姿が整っている部類に入る二人の楽しげな光景は、少しばかり絵になることから、クラスの視線も自然と集まってくる。自分たちに向けられる好奇の視線が、すこしばかり多いことに気づいた不知火は、「ちょっと歩夢さん」と、少し慌てたように不知火が話しかける。

「何々、どうしたの」

「歩夢さん、ちょっと周りみて、なんかみんなこっち見ているみたいだよ」

「えっ」

歩夢はすっとんきょんな声をあげて、周囲をキョロキョロと見回す。

クラスメイトは、歩夢の突然の動作に少し遅れながらも、ほぼ同時に顔を逸した。

「気のせいだよっ、誰も見てないよっ」と全く気づいた様子のない歩夢の姿に、クラス一同は、面倒な展開にならずにすんだと、内心ほっとした。

そんなやりとりをしている内に、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り響き、ざわついていたクラスメイト達も、そそくさと自分の席に戻っていった。

不知火は、授業が始まった後も、なぜみんながこつちを見ていたのか考えながら、なんとなく窓の外を眺めていた。

窓に薄っすら写る自分の姿を見て、肩まで伸びた襟足と、右目を隠すように伸びた、アシンメトリーな前髪が気になり、少し鬱陶しげにいじり始めた。

不知火は、髪の毛と格闘しながら、授業時間いっぱい考えたが、結局その理由はどれも外的なものばかりであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0030ba/>

完全人間 ～ 不知火仏の一日 ～

2012年1月12日23時50分発行